
2つの石と3つの花 そして狐

在形 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの石と3つの花 そして狐

【Nコード】

N7919M

【作者名】

在形 直

【あらすじ】

寓話です。静かに暮らしていた5人の若者がある男を助けます。男は若者をたぶらかし騙すのですが…。

（前書き）

昔書いたもの、なにか寓話的なものを書きたいと思い書いた記憶があります。

今読むと、このときの自分は若かったんだなあと思ってしまふ。
こういう作品はもう書けないだろうと思う。

5人の若者がいました。

アカシアは太った男の子

鷹目石は元気な男の子

黄水晶は笑顔の素敵な女の子

あせびは物静かな美しい女の子

あつもり草は変わった気まぐれな女の子です。

5人は仲良く暮らしていました。

5人はとても満足していました。

それは ここでは悲しいことや怖いことがなかったからです。

太陽はおだやかに、北風はやさしく、皆をつつんでくれます。

食べ物にあふれていて、畑はいつも豊作でした。

5人はこのままずっと仲良く暮らせればいいなと思っていました。

ある日、5人の所に1匹の狐がやって来ました。

狐はとてもお腹がすいていて死にそうでしたが、

アカシアは狐を見つけると食事と宿を与えて、看病しました。

アカシアは困っている人をほっとけない性格なのです。

狐は元気になり、野山を走り、健康を喜びました。

ふと畑を見ると、作物がたくさん実っています。

それはすべて5人の若者達が心を込めて育てた作物でした。

5人は刈り入れに忙しく、狐は手伝いをしました。

こんなにたくさんのお金をどうするのだろうか？

街にいけばたくさんのお金になるのじゃないか？

狐は若者達に笑いながら話しかけました。

「こんなにたくさん5人で食べられないでしょうに？」

アカシアはそれを聞いて答えました。

「冬になるとお腹をすかした人たちがやってくるんだよ、その人達の分もつくっているんだ」

鷹目石がいました。

「今年は前の年よりもたくさん実ったから、来年はもっととれるようにしない」と

鷹目石は常に前進している事が好きなのです。

あせびがそれを聞いて鷹目石に話しかけました。

「なにか手伝うことはあるかしら、鷹目石？」

あせびは誰かの為に行動することが大好きなやさしい女の子です。

「どうすれば、もっとたくさんのお作物が実るのだろう」

鷹目石は難しい顔をします。一緒にあせびも難しい顔をしました。

その時 黄水晶が大声で笑います。

「2人とも無理しちゃだめよ、楽しむ事をわすれないでね」

2人とも難しく考えすぎている事に気づき笑います。

「こんな顔をしていたわよー」

黄水晶が眉間に皺をよせ、面白い顔をしました。

4人は大笑いしました。

黄水晶は皆を楽しませる事が好きな女の子なのです。

ただ一人あつもり草はだまっています。彼女は移り気で、なかなか皆の輪に入らないのです。

でも彼女なりに4人の事が大好きでした。

狐はその話を聞いて、こんなたくさんのお作物をただあげるなんてなんてもったいないんだろうと思いました。

大都市に行けばたくさんのお金が入るのに…

畑を見れば見るほど、狐はそれを一人占めしたくなりました。

狐は5人がお金を知らないから こんなにのんきなだろうと思ってお金があれば、大きな家を建てられるし、きれいな洋服も着れるん

だよと話をしました。

でも 若者達は今の生活に満足していたので、狐の話を聞いてもな
んとも思いませんでした。

ただ一人あつもり草を除いては…

あつもり草はきれいな洋服がとつても欲しかったのです。

夜になり狐とあつもり草は荷車に作物をのせ、大都市に向かいまし
た。

大都市はたくさんの人々がいて 騒がしく嫌な匂いもします。

あつもり草は早く帰りたいと思いましたが、きれいな洋服が欲しか
ったので我慢しました。

次の日、4人の若者が作物がすべてなくなっているのでびっくりし
ました。

今ある食べ物だけだと冬が越せません。アカシアがあつもり草がい
ない事に気づきます。

「あつもり草がない、どうしたんだろう？」

アカシアはとても心配になったので、あつもり草の家に行きますが、
あつもり草はいませんでした。

4人は心配して山や野原を歩き回りましたが、どこにもいません。
そうしているうちに夜になり4人はこれからの事をかんがえました。
あつもり草はどうしたのだろう？冬どう過ごしたらいいのだろう？
とても不安になりました。

次の日 ふらふらとあつもり草がやって着ました。きれいな洋服を
着ています。

4人は驚いて、どこにいったか尋ねました。

「大都市に作物を売りにいったの、ほら、きれいなお洋服！」

鷹目石が怒りました。冬に食べる作物がなくなった事を言います。

そうすると、あつもり草は青ざめて泣きました。自分がしてしまった事に気づいたからです。

アカシアはあつもり草をなぐさめました。黄水晶も彼女を励まし元気づけようとします。

あつもり草がもう十分反省している事をわかっていたからです。

5人は狐の所へいって作物をかえしてもらおうと大都市に行きました。

狐は大きな家にすんでいて、門には怖い兵士がいます。

鷹目石が門を通ろうとしますが、兵士は通してくれません。

狐は私たちが困っている事を知らないんだ、とアカシアは思い、アカシアが大きな声で狐の家に呼びかけます。

その様子を狐はこっそり大きな家の大きな窓からのぞいていました。こんなに大金持ちになったのに、返すなんて誰がするものか！

狐はにんまりして 家を出ようとしませんでした。その様子を目の良い鷹目石が気づきました。

狐は家からは誰も出てくる事はなく、そうしている内に兵士が5人に槍をつきつけました。

しょうがなく 5人は狐の家から離れます。

鷹目石が言います。「狐はお金が欲しくて僕たちをだましたんだ！」

あせびは これからどうしていいかわからなく しくしく泣きました。

鷹目石が怒っていました。

「狐がどこにしようとも絶対見つけ出して返してもらわなくては！」鷹目石はいままでに見たことがないほど、青い目をするごく吊り上げていました。

アカシアと黄水晶は他のところへ行ってなんとか冬を越しましょうと言いました。

2人とも争いが嫌いだっただからです。

いつもは会話にはいらなないあつもり草も責任を感じて、狐の家を見張ろうといました。

あせびもぬれた目を拭きながら、あつもり草を手伝うといました。こうしてアカシアと黄水晶は他の村へ向かい、鷹目石とあせびとあつもり草は大都市に残りました。

大都市に残った3人は毎日狐の家に行きました。

しかし狐は怖い兵士に囲まれて、3人を見ても知らぬふりをします。3人は作物を返して欲しいと大声に毎日叫びました。

狐は自分の悪巧みがばれるのを怖がって、えらい役人にたちの悪い若者が大声でさわいで困っているとうったえました。

役人は3人を追っ払い 戻ってこないようにと言いました。でも3人はあきらめませんでした。

毎日狐の家に行き大声で叫びました。

今度は狐は役人に3人を捕らえて欲しいといいます。

役人は斧を持ち、3人を捕らえようしました。

3人は逃げましたが、役人は足が速かったので3人を細い道へ追い詰めました。

道は行き止まりになっています。

すると、あせびが2人を逃がそうと役人に体をぶつけました。

2人はどうにか逃げ延びましたが、あせびは役人に捕まってしまったのです。

あせびが捕まったのを見てあつもり草は怖くなりました。

鷹目石にアカシアと黄水晶の所へ行こう！といました。

でも鷹目石はとても頑固なので、どうしても首を縦にふりませんでした。

しかたなく あつもり草はアカシアと黄水晶の所へ一人で行きました。

そうして鷹目石だけが、雨の日もひとり狐の家にいき叫びました。役人が来ては逃げ、また、あるときは、大広場の真ん中で狐がしたことを叫びました。

秋はすぎ冬になります、北風が鷹目石の身体を凍えさせます。

お腹が空きふらふらしながら鷹目石は叫びました。

でも雪が降り始めて体の震えがひどく止まりません。とうとう鷹目石が倒れてしまいます。

その時、アカシアと黄水晶、そしてあつもり草が現れました。

あつもり草が2人を説得して連れてきたのです。

鷹目石にあたたかい食べ物を与えます。

鷹目石は元気になりました。

そして4人はどんな事があってもばらばらにならないと誓いました。狐から作物を取り返して、あせびを役人から返してもらおうと誓いました。

雪の中 大声で訴え続けている4人をみて、人々は思いました。

こんなに一生懸命 毎日役人から追われながらできるのだろうか？

こんなに寒い雪の中で嘘がつけるのだろうか？

人々は4人をみかけると声をかけるようになりました。

たまに、あたたかい飲み物や食べ物をくれる親切な人もいました。

とても大雪の日の事です。役人が震えながらいつものように4人の所へ行きます。

4人が震えながら訴え続けているのを見て、役人は4人がかわいそうになりました。

狐のところへ行き、話だけでも聞いてもらおうようにと4人を見て思いました。

役人はつもる雪をかき分け狐の所へ向かいました。

狐の家はとても暖かく食べ物もたくさんあります。

役人は　こんな大きな家に住んでたくさんのお食べ物に囲まれている狐がうらやましくなり、

どうやったらこんな家に住めるのかと尋ねました。

狐は酔っ払っていて、笑いながら　馬鹿な若者たちがくれたんだよ。と言いました。

役人は疑問に思い　こんな大きな家をあげる気前の良い人がいるのですか？と聞きます。

どうせ　だれかに只であげるものなのだから、私がもらっておかしいはずがないと　にやにやと笑って答えました。

役人は若者達が正しくて狐が嘘をついていることを知りました。

狐は捕らえられ、あせびは皆の元に戻りましたが皆の顔には元気がありませんでした。

大きな家を売り、作物を買いましたが、いつもよりも少なかつたのです。

今年も食べ物がない人が訪ねてくるかもしれないのに、分けてあげるだけの量がなかったからです。

5人が帰ろうと大広場を通りかかった時です。

一人の婦人が彼らの荷車に食べ物を置きました。

そうすると今度はちいさな子供が食べ物を置きます。

そうやって　たくさんの人々が5人に少しずつ食べ物をもってきました。

若い人、年老いた人、小さな子供達…みんな5人に声をかけ、やってきました。

そうして、荷車には山のような食べ物がありました。5人は感激して人々にお礼を言います。

一人の婦人が言いました。

「私たちは毎日、役人に追われても訴え続けたあなた方をしつてい
るわ。」

一人の青年が言いました。

「仲間がとらわれても恐れなかった事を知っているよ。」

そして、それぞれが5人に語りかけます。

「寒い雪の中もあきらめないで立っていた事をしっているの。」

「そして私たちは本当の事を見ようとしなかったから。」

「そしてあなた方は真実をみせてくれたから」

こうして、あたたかい空気に包まれ5人は大都市の人々となかよく
なりました。

そうして大都市の人々に見送られ若者達はもとの山々や野原に戻り
ましたが、

2度と大都市に行きませんでした。

その代わり、若者達の所に手伝いに来る人が増えていきました。

5人の若者達の話聞いて訪れる人が増え、そこに住むようになり
ました。

それは村になり 街になりました。

そうして、大きな街になりましたが、それでも冬に食べ物なくな
った人に作物を分け与えました。

5人の若者はもう5人だけではなかったけど、とても幸せでした。

その後ずっと5人と街の人々は幸せに仲良く暮らしたそうです。

おしまい。

(後書き)

花言葉 石言葉 その他

アカシア 友情

黄水晶 リラックス

鷹眼石 決断と前進

あせび 犠牲 危険 あなたと2人で旅をしましょう

あつもり草 移り気

狐 ずる賢い？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919m/>

2つの石と3つの花 そして狐

2010年10月11日02時39分発行